

中年期女性の危機に関する研究

——青年期以前の未克服課題が顕在化した事例を通して——

幸 順 子

問題と目的

かつて、青年のモラトリアム、危機、アイデンティティ等という言葉がもてはやされるようになったのと同様に、最近では、ミドルエイジとか、ミドルエイジクライシスということが、盛んに言われるようになってきている。

最近の中年の諸問題に関する異常な過熱ぶりは、かつて青年の危機にあった人たちが、今、中年になったというような世代的な問題を抜きに語ることはできないが、それでも昔から、厄年の中の大厄が男性42歳、女性33歳を指すように、中年の危機は世代を越えた普遍性を有していると思われる。

最近の中年の危機に関する研究は、死の受容やパーソナリティの変化を扱う実存的、心理的なものから、精神発達や精神障害を扱う、臨床的、精神医学的なもの、また、純粋に身体的な変化を扱う医学的なものや、対人関係、役割、ライフスタイルなどに注目する心理社会的なもの、そして更には、自殺などの社会現象の側面からとらえたり、社会構造や歴史の推移の中で人間をとらえる、社会的文化的、人類学的な研究など、その分野は多岐に亘っており、実に様々な角度からの研究がなされているようである。その中で、特に本研究で問題としたいのは、心理臨床の問題である。

Jung および Jung 派の分析学者達は、この人生の前半から後半に移行する際の個人の内的課題を個性化(individuation)の課題としてとらえている。ここで示される個性化の過程とは、人生の前半において、役立ってきた問題の解決様式が、人生の後半に入り死や自らの限界に向かい合うに至って、もはや、決定的な効力を示さなくなったことに気づくことから始まる。これまでの人生の延長線上に人生の終局点を見出すことは困難であり、それゆえ、ここでは何らかの価値観の転換が求められることになるわけである。

Jung は中年期以降において求められるこの価値観の転換を内なる異性の発見と統合として示している。内なる異性とは、男性にとって、自己の内に潜ませてきた女性性のことであり、女性にとっては、自己の内なる男性性のことである。これらを発見し、人格の内に統合させ

ていくことが、中年期以降の課題であり、また、その統合の過程に起こる内的な葛藤状態が中年の危機を示すものなのである。この内的葛藤状態においては新しい方向を生み出したり、あるいはそれを押し止めるような心的エネルギーの働きが自己の内に生じていることを、Jung は指摘しているが、このような視点に立って中年の危機と個性化の過程をとらえるならば、それは心的エネルギーによる自我と自己の関わり合いの変化と統合の過程ということができるであろう。

中年期における課題は、いわば自我志向性から自己志向性への価値の転換であるといえるだろうが、それだけに個人の内での人生前半の課題である自我発達の課題が積み残しになっておれば、中年期の内的葛藤はより危機的になる。なぜなら個人は自我の確立と自己の発見という相違う2つの問題に立ち向かわなければならないからである。中年期の精神障害の多くはこのような問題の存在によるものであると思われるし、本研究で示した事例も、その枠組みによってとらえることができる。

しかし、男性と女性によって中年の危機の様相は異なるようである。Neumann は、これを、男性と女性の自我と自己の性質の違いによって示している。男性の自我が、いわば、自己との対決の上に確立されるのに対し、女性の自我は自己との関係を保ちながら確立されていく。よって人生後半期の内的変化も男性と女性では異なった過程をたどることになる。しかし、男性的な価値観が重視される現代社会では、女性が女性としての自我と自己の発見および統合を成し遂げるためには、相当の困難が伴うことを覚悟しなければならないだろう。

本研究は、中年期において青年期以前の未解決課題が顕在化した女性の事例を通して、中年期の女性の内的葛藤と個性化へ向かう内的変化過程がいかなるものであるかを明確にするものである。研究の目的はその際次の3点に大きくまとめることができる。

- ①事例の記述を通して女性の中年期危機の様相を明確にする。
- ②自我と自己の関係および心的エネルギーのあり方の変化に注目し、個性化に向かう内的変化過程を明確化する。

③これらを通して、女性の中年期危機を統合的に把握する。

事例と考察

本研究で取り上げた対象は、A、B、C、Dの4事例であり、方法は臨床事例研究法である。治療技法としては、共感的理解や感情の反射と明確化を中心とするアプローチを基本としているが、必要に応じては解釈などの分析的技法も採用した。

① 女性における中年期危機の様相

事例のA、Bは夫婦関係、Cは夫婦関係と親子関係及び自分の性格、Dは離婚をそれぞれ主訴としているが、4人とも夫婦関係における葛藤が中心である。しかし各事例の内界を探ってみると、葛藤の背後には各自の親との関係の問題が潜んでいることが見出だせる。ここでいう親との関係とは、実際の親子関係以上のものである。各自の現実の親に対する感情は、発達の過程で個人の内面に作り上げられた内なる親イメージが、現実の親に投影された表れであると考えられるが、ここで重視されなければならないのは、個人の内面で親に対するいかなる認知がなされているかということである。この認知は、意識的な範囲内を越えて、無意識から目に見えない力が働くようにして個人の自我に影響を与えている。

Aの場合は、大切にされ保護される女性としての自我を生み出しているし、Bの場合は、理想への同一化と影の抑圧という問題を生み出している。またCの場合は、男性性への同一化と、女性性の疎外を、Dの場合は、父権的なものの排除と母権的な段階への固着という問題をそれぞれ自我の内に生み出している。

② 個性化への内的変化過程

上に示した、各事例の、対人関係を危機に陥らせるような自我の未熟さや一面的な成長は、自己が自我を育てるものとなり得ていなかったということの説明することができる。中年期に至って各事例が内的葛藤に陥ったのは、このような自我に対し自己が危険信号を発し始めたということである。そこにはこれまで抑圧したり、見過ごしにしてきた自己の側面に働きかける心的エネルギーの存在が感じられる。この新たに生じた心的エネルギーによって活性化された自己の内なる一側面は、次第に自我の上に頭をもたげ、各事例の人格に影響を与え始める。

Aの場合は、最初、男性性が頭をもたげ、女性性が後

ろに追いやられるという内的変化として表れるが、後に女性性が危険信号を発することにより、両性性の統合へと向かい始める。

Bの場合、理想への同一化と影の抑圧という防衛は固い。自己との直面に対し、自我は強い抵抗を示し、葛藤は様々な身体症状や夫への影の投影となって表れる。このことはBの自我がそれだけ脆弱であることを意味するが、この場合は治療者がBの補助自我の役割をとることによって、次第に自己に目が向けられるようになった。しかしそれはまだ出発点の段階であり、自己の内なる影を人格に統合するのは、これから先の課題である。

Cの場合も男性性への同一化は強いが、夫婦関係の問題が明確化されてくるにつれて、夫に対する認知が変化し、見失われた女性性の存在を予感し始める。それと同時に現実生活でのCの活力は極端に低下するが、これはこれまでとは異なる心的エネルギーが生じ、Cを無意識の内へと導くような自己の働きが始まったことを示していると考えられる。

Dの場合は、夫の存在を通してDの内の父権的なものが母権的なものに影響を与え始めるが、Dの母権的なものへの固着は強く、結局は夫と離婚することによって葛藤を回避してしまった。

③ 女性における中年期危機の統合的把握

以上に示してきた各事例の内的課題はそれぞれ異なる様相を持ちながらも、自我の成長と自己との出会いを問題にしているという点で共通している。またここに示された内的変化過程は、人格の統合に至る過程の一部である。

ここでは人格の変化過程という側面から、女性の中年期危機をとらえてきたわけであるが、これは様々な中年期危機研究で最もミクロな部分に焦点をあてたものとして位置づけることができるであろう。ここにおける女性の中年期危機の特徴は、事例を通してうかがうことができる。B、Cに比べ、A、Dの自我は比較的安定性が高かったが、これはA、Dの自我が、B、Cに比べ、本来的で女性的な自己との結び付きを失わずにきたことと関係していると考えられる。本来的で女性的な自己との関係が保たれ、しかもその上で自己の内の男性性に向かい合うことができるならば、中年期以降、女性の自我と自己は、より統合されたものとして発展することができるようである。